



Data

監督・脚本・編集: 岩井俊二
原作: 岩井俊二 『ラストレター』
出演: 松たか子/広瀬すず/庵野秀明/森七菜/小室等/水越けいこ/木内みどり/鈴木慶一/豊川悦司/中山美穂/神木隆之介/福山雅治

■ショートコメント■

◆岩井俊二監督作品と言えば、『スワロウテイル』(96年)はメチャ面白かったし、『花とアリス』(04年)、『シネマ4』326頁)も、『リップヴァンウィンクルの花嫁』(16年)、『シネマ38』88頁)もすばらしかった。もともと、中山美穂が主演した『Love Letter』(95年)を私は観ていないので、その「アンサームービー」とも考えられる本作の狙いは私にはよくわからない。

本作の主演は、死亡(自殺)した遠野未咲の妹である岸辺野裕里役を演じる松たか子。しかし、『花とアリス』における鈴木杏と蒼井優と同じように、本作でも未咲の娘・遠野鮎美役を演じる広瀬すずと、裕里の娘・岸辺野颯香役を演じる森七菜という2人の若手美人女優がストーリーを牽引するらしい。すると、きっと本作も岩井監督らしい瑞々しさでいっぱい。そんな期待を持って試写室へ!

◆今ドキはメールではなく、最初に交換したラインですべての「対話」をしてしまうから、「文通」はほとんど死語になっている。しかし、何度も観た予告編では、「拝啓 乙坂鏡史郎様」から始まる手紙を読むシーンが登場していた通り、本作は文通がテーマ。しかし、ラブレターの盗み読みはルール違反で厳禁のはず。また、妹・裕里が姉・未咲になりすますのも本来はダメなはず。ところが、本作ではそんな要素が複雑に絡み合ってくるうえ、宛先の違反や誤配も絡んでくるので、全体的に一筋縄にはいかないストーリーになっている。

『マチネの終わりに』(19年)、『シネマ45』未掲載)に続いて福山雅治が乙坂鏡史郎役で主演していることには、半分ビックリ、半分ウンザリだが、さて、彼が演じる作家乙坂鏡史郎の出来は?

◆いくら美人姉妹でも、死んだ姉・未咲の代わりに妹の裕里が、それを報告するべく高校の同窓会に出席したところ、みんなから姉に間違えられるなんてことがあり得るの？また、姉が自殺してまだ1カ月なのに、実家で姉の娘・鮎美と妹・裕里の娘・颯香があんなに仲良くはしゃぎ合うことがあり得るの？本作は自らの原作を元に脚本・編集した映画だが、私には冒頭からそんな疑問が次々と。

また、石坂洋次郎の小説『青い山脈』では、「恋しい恋しい私の恋人」と書くところを、「変しい変しい私の変人」と書いてしまうラブレターの失態が面白いストーリーを形作っていた。しかして、回想シーンを多用する本作では、高校時代に優秀な生徒会長だった姉・未咲（広瀬すず）に一目惚れした、同級生の乙坂鏡史郎（神木隆之介）が書くラブレターを、配達役を買って出た妹・裕里（森七菜）がすべて盗み読みしているという行儀の悪さが私には目立ってしまう。更に、同窓会で再会した裕里扮する未咲宛に、乙坂（福山雅治）が出す手紙に対しても、未咲になりすました裕里が返事を書くことによって、奇妙な文通が始まっていく姿はどこか変。

このように、本作では、岩井俊二の原作『ラストレター』そのものが少し怪し気（？）に見えてくるのだが・・・。

◆高校の卒業式。それは誰でも思い出多き青春時代の1コマだが、本作では、その日に生徒会長の未咲が卒業生代表として読む「答辞」がポイント。パンフレットに掲載されているその全文は岩井監督が考え抜いた文章だろうが、高校時代を受験勉強一本槍で過ごしてきた（？）私には、少し違和感がある。もちろん、「初恋モノ」「ラブレターもの」として十分理解はできるが、私的にはやはり舟木一夫が歌ったヒットソング『高校三年生』的なイメージの方がピッタリだ。

さあ、SNSの時代、そしてラインの時代の今、岩井監督があえて挑んだラブレター、文通を核とする初恋モノは、若い世代にどのくらい受け入れられるのだろうか。

2019（令和元）年11月29日記